

日本言語政策学会ニューズレター

Japanese Association for Language Policy SEPTEMBER 2025

2025年9月11日発行

この号の内容

1. 第27回大会報告
2. 2024年度学会賞報告
3. 会員紹介
4. 会員著作物紹介
5. 2025年度特定課題研究会について
6. 事務局からのお知らせ

発行：日本言語政策学会

〒112-8631 東京都文京区大塚1丁目4-1

中央大学 小田格研究室気付

E-mail: jalp.jimu@gmail.com

URL: <http://jalp.jp/wp/>

1. 第27回研究大会報告

大会委員長 岡本能里子(東京国際大学)

1. 第27回 研究大会 報告

2025年6月7日(土)8日(日)に、神奈川大学みなとみらいキャンパスに於いて第27回研究大会が開催されました。大会テーマを「言語政策研究に求められるアクティビズムを考える」とし、参加者数は、1日目220人、2日目の最終集計では合計251人となり、過去最高を記録しました。アンケート結果から、一般会員39.5%、非会員42.1%、今回初めての参加者39.5%で、非会員と初めての参加者が多かったことが注目されます。

1日目の午前は、対面でのWipセッションが行われ、4件のグループ発表と1件の個人発表があり、活発な質疑応答が行われました。

1日目の午後は、粘り強いアクションを通してまちづくり条例成立に繋がられた基調講演とそれを受けて3人の方をお迎えしたシンポジウムでは、登壇者それぞれが考える「アクティビズムとは何か」を、ご研究現場での実践を通してうかがいました。時間を延長しての活発な議論が行われ、「言語政策研究に求められるアクティビズムとは何か」について共に考えを深める機会となりました。

・基調講演

崔江以子(川崎市ふれあい館館長)

差別のない社会の実現へ。前へ、前へ、ともに

—「川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」の成立まで—

日本言語政策学会ニュースレター (No.41)

・シンポジウム

藤田ラウンド幸世(大東文化大学)

山本直子(東洋英和女学院大学)

下地ローレンス吉孝(沖縄大学・地域研究所)

指定討論者:上村圭介(大東文化大学)

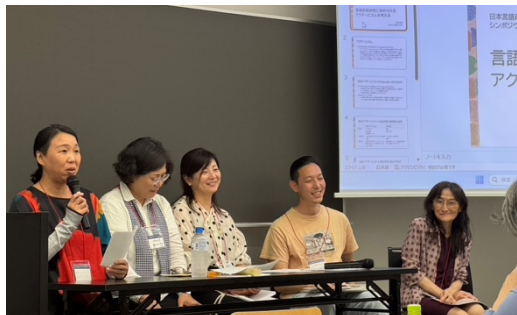
司会:岡本能里子(東京国際大学)

2日目の午前、公募による口頭発表18件、ポスター発表4件、午後には過去最高の7件のパネル発表が行われました。また、1日目の懇親会では、参加者相互の親睦を深めることができました。

事後アンケートによると、参加目的の1位が「興味がある研究発表」で73.7%を占め、満足度では数値でも自由記述にも特に基調講演、シンポジウム、パネル発表に高い満足度が示され、ここ数年の学会で一番心を揺さぶられた基調講演だったとの嬉しい感想をいただきました。この成果を導いて下さった全ての発表者、参加者皆様に御礼申し上げます。

最後になりましたが、研究大会の準備段階から当日運営までを完璧に担って下さった神奈川大学源邦彦実行委員長、大学教職員の方々、アルバイト学生のみなさん、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

第28回も開催校実行委員長と連携し、より多くの方々にご参加いただけるテーマやプログラム準備したいと思います。引き続きご支援ご協力のほどよろしくお願い致します。



シンポジウム スナップ

2. 2024 年度学会賞報告

2. 2024 年度 学会賞報告

第26回研究大会(2024年6月)での研究発表について、学会賞選考委員会ならびに理事会の慎重な審議により発表賞2名の受賞が決定し、第27回研究大会で表彰式が行われ、表彰状が授与されました。なお、学会誌

2. 2024 年度 学会賞報告

『言語政策』第20号、21号の優秀論文賞については、追ってお知らせいたします。

<発表賞（口頭発表部門）I>

受賞者：中島 武史さん（兵庫教育大学 准教授）

発表タイトル：コミュニケーションに対するAbleism と身体への介入

講 評：

中島氏の口頭発表は、聞こえない・聞こえにくい人たちの身体への介入を取り上げ、障害学で扱われる ableism 概念を用いながら、この介入が、聞こえないことを否定的に捉える理解を基盤にした「健常者」による言語的差別現象であること、また、彼らの数を極端に減少させる危険性を生み出す考えであることを指摘するものである。聞こえない・聞こえにくい人たちに対する ableism とは、音声言語を聞く、話す能力を無意識のうちに価値あるものと評価し、同時に「健常者」から特定の能力を差し引いた存在として彼らを理解する思考であり、その結果、聞こえない・聞こえにくい身体に対する訓練や治療の発想を生み出すことにつながる。教育や研究も、聞く、話す能力によるコミュニケーションの達成をいかに可能にするかが目的となり、実際に医学領域で身体への介入が実践されてきた結果、現在では人工内耳の頭部埋め込み術が広く見られ、手話話者人口の減少につながっている。さらに、難聴遺伝子の特定も進んでおり、その診断が健康保険の対象となるなど、中島氏はこうした傾向に危機感を示した。その理由は、出生前遺伝学的検査（NIPT）で陽性結果を受けた例の多くが人工妊娠中絶を選択し、結果的にダウン症児の出生が抑制されている現状があり、難聴遺伝子研究も先例に習う形で実施されるようになれば、聞こえない・聞こえにくい身体をもつ人の出生率も同様に低下する可能性が否定できないからである。これは ableism に基づく言語差別現象であり、すでに少数化されている言語への更なる抑圧になりうる。中島氏の発表は、これまで言語学研究からは明確にされてこなかった身体と結びついた少数言語やその言語コミュニティの維持に対する危機を新たに訴えたことで、高く評価された。以上のことから、発表賞（口頭発表部門）の受賞者にふさわしいと判断し、また、昨年に続く受賞であることから、本学会における今後の活躍・貢献を強く願うものである。

2. 2024 年度 学会賞報告

<発表賞（口頭発表部門）2>

受賞者：浪貝 美砂さん（青山学院大学大学院博士後期課程・明星大学）

発表タイトル：日本政府の留学支援策のディスコース分析―「共生社会」の位置づけに着目して―

講 評：

浪貝氏の口頭発表は、2023 年の日本政府の留学支援策における留学生像のディスコースを通して「共生社会」の理念が表象される様を探ったものである。2023 年というのは、2020 年から続いた新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが引き下げになり、移動の制限が緩和された年である。留学生の受入れと派遣が再開され、コロナ禍で進んだ教育のオンライン化に対して、物理的な移動を伴う留学の意義が改めて問われる契機となった。留学支援策に関する告知・広報用文書 3 点を分析対象とし、2 種類の留学生「日本から送り出す留学生」と「日本にて受入れる留学生」とのディスコース間における共通点と相違点に注目した。これら 2 種類の留学生像の相違点から、留学支援策には国籍、言語、役割の枠組みが現れており、日本政府の共生社会観に「国家」の概念が認められることを指摘した。両者が日本における「共生社会への変革者」とみなされる一方で、「日本人留学生」には「英語」を習得した上で「グローバルリーダー」や「自覚ある国民」の役割が、「外国人留学生」には「日本語」を習得した上で「多様性の促進役」が期待されて、日本人か外国人かで、理想の留学生像としての描かれ方が異なることが明らかにされた。また、日本には様々な国籍の人が生活しているにもかかわらず、日本から留学へ送り出す対象者が「日本人学生」に限定され、「外国人学生」の表記が無いことは、日本政府が掲げる「共生社会」の理念と隔たりがあることも問題提起された。浪貝氏の発表は、送り出しと受入れという 2 種類の留学生を区別してそれぞれのディスコースを詳細に検討しただけでなく、相違点も明らかにするという点に新規性があると認められた。発表時の口頭説明や投影資料に加え、質疑応答に対してもわかりやすい説明がなされており、以上のことから、発表賞（口頭発表部門）の受賞者にふさわしいと判断した。

発表賞（ポスター発表部門）

審査対象者なし。

2. 2024 年度
学会賞報告

【発表賞（口頭発表部門）受賞者の声】

中島武史（兵庫教育大学）

このたび第 26 回研究大会の発表賞に選出いただき、ありがとうございます。本発表では、Ableism 概念をもとに健常者のコミュニケーションに優位性を与えている社会のあり方について批判的検討を行いました。

具体的には、聞こえない・聞こえにくい身体に対する介入が遺伝子研究にまで及びつつあることを示し、そこにある音声言語を話すことへの聴者による信仰が手話言語を危機においやっていると指摘しました。

最後になりましたが、お忙しいところお時間を割いて審査していただいたみなさま、またいつもお世話になっているみなさまに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

浪貝美砂（青山学院大学大学院博士後期課程・明星大学）

この度は発表賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、これまでご指導くださいました先生方に深く感謝申し上げます。

私は、大学職員として留学生の受入れと送り出しを支援しながら、博士後期課程の学生として研究を行っています。昨年の発表では、コロナ禍による移動の制限が緩和された 2023 年の日本政府の留学支援策 3 点において、2 種類の留学生像が描出される様の共通点と差異について述べました。「派遣する留学生」と「受入れる留学生」への異なる期待の意味を探り、「留学生とは誰か」という問いに取り組んでいます。発表当日は、会場にて多角的なご質問やご助言をいただき、大変励みになりました。今後、様々な言及される「留学生」のレンズを通して、私たちの社会で共有されうる人材観や言語観等を見ていきたいと思っています。視野を広く持ち、かつ思考を深めて研究を進めていく所存です。



授賞式スナップ（左から浪貝さん、西山会長、中島さん）

【委員長雑記】

学会賞選考委員長 藤井久美子（東洋大学）

今年度の大会では、昨年度の大会での研究発表に対し、2名に授賞を行うことができた。大変喜ばしいことである。2名の若手研究者の方々には今後ますますご研究を発展させていただきたいと願っている。と同時に、大会での発表賞の廃止についてもこの場を借りて改めてお伝えしておきたい。昨年度の本雑記では審査員不足の状況に言及させていただいたが、こうしたことから、2018年に始まった学会賞発表賞を廃止することとなった。「廃止」と書きながら、「いや、これは『一旦廃止』、『休止』、それとも『停止』というべきか…」などと逡巡もしたが、再開もあり得るとはいえ、この場ではまずは「廃止」とお伝えさせていただく。

今年度の大会は「言語政策研究に求められるアクティビズム」をテーマとして開催された。研究者は学術的な発信をもって「行動」「活動」を行うが、言語政策は幸福追求権に大きく関わる学問分野である。われわれはその一員として、机上で空論を交わすのではなく、地に足を付けて人に寄り添うことを忘れてはならないことを強く感じた。こうした意味において、今回の授賞者のご研究は、研究レベルの高さ、将来性は言うに及ばず、学会が目指すものに合致していたといえる。大会での発表賞は「廃止」されたが、言語政策研究はこれからも続く。来年の大会を楽しみにしたい。

（文責：藤井久美子）

3. 会員紹介

3. 会員紹介

日本語教育現場の視点から 言語政策と実践をつなぐ研究を目指して

山元一晃 (金城学院大学)

私の言語政策への関心は、日本語教育の実践から生まれています。これまでは、医療専門職を目指す留学生のための支援に関わってきており、現在は、交換留学生の日本語教育と日本語教師養成に関わっています。現任校に着任後、登録日本語教員制度が始まり、本学も登録日本語教員養成機関への登録を目指すことになりました。その過程において、日本語教育は国の政策と強く関わっていることを実感しました。こうして言語政策と日本語教育との関係について問題意識を持つようになりました。

また、日本言語政策学会に入会したあとの参議院議員選挙において、ある政党が日本人を優先するということをスローガンにし始めました。日本語教育は、一般には日本人としては定義されづらい人を対象としており、差別的な言説による悪影響を受けやすい人たちです。実際に、日本語教師を目指す学生から不安の声を聞くこともあります。言語教育や日本語教員養成に関わる者として、言語政策にも意識を向けざるを得ないと強く思うようになってきています。

これまでの研究では、主に統計的な手法を用いて医療分野の専門語彙リストを作成し、留学生の支援につながる教材開発を行ったり、インタビューを中心としたニーズ調査を実施してきました。日本言語政策学会に入会したいま、これらの手法を言語政策研究に応用することができないかを模索していきたいと思っています。日本語教育現場の視点から、政策と実践の間にある課題を可視化し、両者をつなぐ研究を目指したいと考えています。

言語政策研究の分野においては新参者であり、未熟な知識のまま暗中模索をしているところです。しかし、専門日本語教育や登録日本語教員養成機関への登録を前提としたカリキュラム改定を行った経験を活かし、この分野に新たな視点を提供できればと思います。会員のみなさまにいろいろと教えていただきながら、言語政策研究へも貢献をしていきたいと考えています。

4. 会員著作物 紹介

4. 会員著作物紹介

(2025 年 4 月～2025 年 9 月)

西山教行・大山万容編著(2025 年 6 月)『複言語主義における創造性と多元性 誕生と展開、教育実践、文化翻訳の視座から』明石書店

榎陽子・岡典栄(2025 年 8 月)『日本手話がおしえてくれることーろう者から学ぶための 65 の疑問』大修館書店

山本冴里(2025 年 9 月)『複数の言語で生きて死ぬ 人生物語編』くろしお出版

※会員著作物の情報提供を随時募集しております。特に、辞典類など共著者が多い場合は見逃している可能性があります。過去の著作物でも 2020 年 1 月以降のもので未掲載の場合は、追補していきますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

なお、対象は単著・共著を問わず、単行本、定期刊行物(学会誌や大学紀要論文を除く)、翻訳書などです。

情報提供先: JALP 広報委員会 jalp.pr@jalp.sakura.ne.jp

5. 2025年 度特定課題研究 会について

5. 2025 年度特定課題研究会 について

2025 年度の特定課題研究会として、新規に以下の 3 つの研究会が採択されました(2025 年 6 月 8 日総会)。

- ①「2050 年の未来から言語政策を考える: 社会における規範の変容に焦点を当てて」
代表: 村岡英裕(千葉大学)
- ②「言語政策教育の内容と方法」
代表: 猿橋順子(青山学院大学)
- ③「各国・地域における言語政策の新展開」

代表:小田格(中央大学)

6. 事務局からのお知らせ

6. 事務局から のお知らせ

<2025 年度年会費について>

今年度は、8 月下旬に会員の皆様宛てに請求書及び振込用紙を郵送するよう準備しております。お手数をお掛けいたしますが、当該文書がお手元に届きましたら、ご対応くださるようお願いいたします。なお、領収書が必要な場合には、お振込みの後、事務局(jalp.jimu@gmail.com)までメールでご連絡ください。

<2026 年度特定課題研究会の募集について>

来年度開設の特定課題研究会を募集いたします。詳細につきましては、11 月頃に学会メーリングリスト及びホームページでお知らせする予定です。今しばらくお待ちください。なお、2025 年度は 3 件の新規採択がありました。次年度もぜひ積極的にご応募ください。

編集後記

ニュースレター41 号をお届けします。寄稿と情報提供にご協力くださった皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

お気づきのかたもいらっしゃるかと思いますが、今号から「若手会員紹介」の欄を「会員紹介」に改めました。「若手」という年齢を示す語の使用を避ける、という意味もありますが、当学会に入会して比較の日が浅い会員の研究を幅広くご紹介できるようにするための実質的な変更です。

今年もまだまだ残暑が続くようですが、どうか皆様ご自愛ください。(広報委員 NK)